

『おもちゃ繪』の話

——日本幼稚園協會二月常會の講話——

文學士 權田保之助

只今は、倉橋文學士から、非常に有益な、また面白いお話がございましたが、私は實際、教育——ことに兒童教育幼兒教育には無經驗の者ですから、其方面にとつても面白いお話はむづかしいと思ひますが、今、これからお話致さうと思ふ「おもちゃ繪」の話は、全く私が五六年まへから自分の趣味として、集め初めたものについて、之に何等かの意味をつきたいと云ふ考から急にやり出したもので、特別の方針、主義、目的のもとに集めて其結果を發表すると云ふものではありません、只今、倉橋さんのお話を伺つて居て、それがおもちゃ繪の話の一番おしまひに來る結論の裏書をして頂いた事になるので、非常に面白く感ずるのであります。

別室に「おもちゃ繪」を陳列しておきましたが、これはもとより趣味の上から集めたにすぎぬものですから、大海の一滴にもあたらないのですが、今日は先づ實物を見て頂くを主として、それにつけ加へて少しばかりお話したいと思ふのであります、たい一寸附け加へて申上たいのは「おもちゃ繪」は子供がもてあそぶものですから非常に手垢でよごれてゐます、お目にかけるものの中にも紙の左右の端が手垢がつきボロボロになつてゐるのがあります、きたないと云ふ感をお起しになるかもしれません但其處をよく御了解を願ひたいとおもひます。扱、

○おもちゃ繪とは何

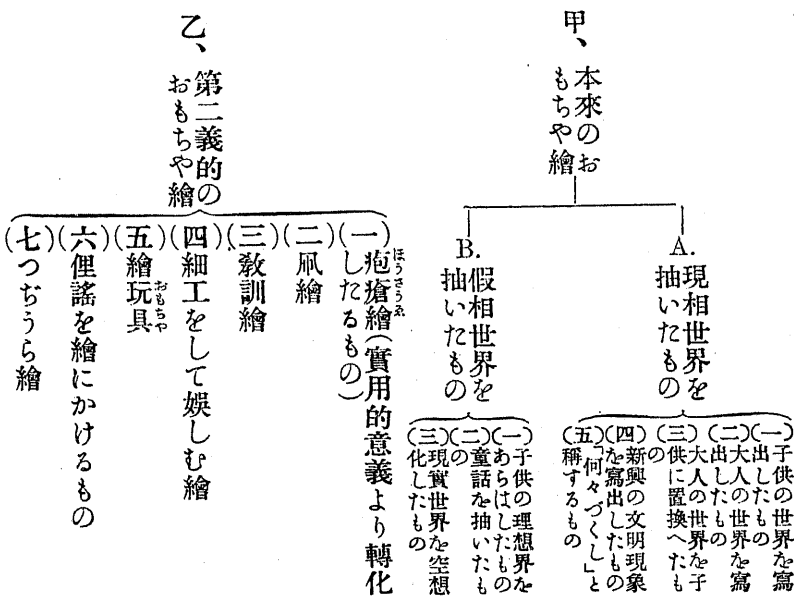
「おもちゃ繪」と云へば、一寸考へてすぐわかる様ですが實際は難しいのであります。私が嘗つて

東京で有名な、おもちゃ繪蒐集の人から見せて貰つたものは、玩具を主題とした繪ばかりでありました、しかし私の考では、かゝるものは、大人が喜んで弄ぶもので、大人の一種の趣味のために存するものであると思ふ。私の云ふ「おもちゃ繪」とは、子供を主としたるもので即ち、おもちゃ繪の享樂の主體が、子供にあると云ふ事である、且これを樂しむとしてもこの繪が、たつた一枚では仕方がない、方法の如何をとはす多量を製作する事が必要である、即ち其方法としては昔は木版であつたが、今は印刷術によるのであつて幼年雜誌が多數に作られて居ります。

そこで、おもちゃ繪とは、子供を享樂の主體とする版畫なり、と云ふ事が出來ます。

○おもちゃ繪の種類

先づ解りやすく表にあらはせば次の如くになります。



今この各々について次に説明致しますと

本来のおもちや繪とは繪そのまゝを子供がたのしむので第二義的とは其儘で樂しむのでなく之を剪るとか、貼るとか、組立てるとか、或は双六、十六むさし、加留多など繪をもとにしたる玩具を云ひます。

(甲) 本来のおもちや繪

A. 現相世界を抽出したもの

(一) 子供の世界を寫出したもの——即ち子供の遊びを寫出したもので、一番子供の樂しむものとしては適當なるものであります、かの浮世繪で有名な「國芳」と云ふ人が盛にかいて居る、しかし、これは子供のためと云ふよりも大人が子供の遊びを見てたのしむと云ふ方面から、寧ろ、大人のために書いた傾向がある、繪も奇麗であり、又價も高く精巧に出來て居ます、随つて純粹な意味で「おもちや繪」とは云へません。しかし其の中にも三代目廣重がかいたと思はれて居るものは價もやす

く、子供のためにかいた子供の遊びの繪と云へませう。

(二) 大人の世界を寫出したもの——子供は自分だけの遊びを書いて貰ふよりも、彼等にとついても珍奇に映ずる所の大人の世界をかいてもらふ事を誠に喜ぶものです、しかしこの中にも男兒は同じ大人の世界を寫すにも、其戶外生活を喜び女兒は室内生活を喜ぶ、又男兒は特に力のある、しかも團體運動が好きで例へば多人數の行列するのが彼等の興味に合するので古くは大名行列、火消し、お祭りの繪など多く、現今では之が兵隊の行列、軍艦のならんだ所などに變つて來たのであります。これに對して女兒は「所帶づくし」と云ふ様なものや、臺所道具をならべた繪などに興味を感ずるのであります。

(三) 大人の世界を子供に置き換へたもの——これは、一層大人の世界を子供に近づけるのであつて大名行列にしても、火消しにしても、皆子供がす

ると云ふ事になつてこれにより子供は非常の興味を感ずるのであります。

(四)新興の文明現象を寫出したもの——子供ほど新しい現象を面白がるものはない、彼等には古い傳説も習慣もない、其處で新しく起り來る文明現象に一番よく注意するために之を寫し來つて「おもちゃ繪」にする、實に新文明を持ち來つて樂しむのは「おもちゃ繪」が一番早いのであります。

繪のみならず玩具でも、また、そうであつて、今の様に自動車がはやれば、すぐ其玩具が出來、飛行機がとべば、すぐ、之を玩具につくる、(實際の飛行機よりも玩具の方がよくとぶ位である)人力車、相乗りの流行つた時代には其繪が出來、外國人が來ると異人さんのおもちゃ繪が子供に喜ばれる。

(五)何々、と稱するもの——馬をならべて馬づくしなど、云ふ類で兎に角、子供の事物に對する概念的の知識を整理するので、彼等の好みに應

じながら之を一つ概念に入れて行くと云ふ、先づ知識教育に關するものであります、馬づくし、鳥づくし、貝づくし、八百屋づくし、蟲づくし、植木づくし、面づくし、などいろいろあります。

B. 假相世界を抽いたもの

これが實に「おもちゃ繪」としての本領を發揮する所であつて子供が本來空想的なもの故か、る部門のあらはれるのは當然な事であります。

(一)子供の理想界をあらはしたもの——こゝに理想と云つても元來「おもちゃ繪」書きは教育にたづさはる様な人ではありませんから、其理想もごく卑近なもので先づ人格上の理想としては男兒のためのものとしては英雄豪傑を畫いたもの、即ち武者繪があり、女兒の之に對立するものは姉妹繪即ち世の母親、姉、又は老人の生活などは理想になるので、なかには如何はしい姉妹さへ書かれて居る。

肉體上の理想としては男兒は強力をよしとして此處に角力繪が出來、之に對して女兒には役者繪が出

来る。

(二) 童話をあらはしたるもの——これには純粹の童話：即ち桃太郎かち／＼山など……をあらはしたものと、おもちや繪のための童話：即ち或は狐、狸など一種滑稽味をおびた動物の傳説をもととして童話に似たものを作つたもの……をあらはしたものとがあります。

(三) 現實の世界を空想化したるもの——子供はあらゆるものに對して同情を持つて、自分と全く同じものと見做し、同じ仲間とする、實に子供の空想は大空想で、生命なきものも之を捉へて現相世界に活躍させる。猫の芝居、たこ入道の芝居などの繪も出來また酸漿ホフキを人間にして、入浴、姉様ごっこなどのおもちやが出來る、又は獸をつかまへて商人に見たて、或は虎を竹屋に、羊を紙屑屋にしたりする。實に「おもちや繪」としての面白さ純なるものが此處にあるのであります。

(乙) 第二義的のおもちや繪

(一) 疱瘡繪——これは實用的の意味から變つて來たもので、昔から疱瘡には赤い色がよいとなつて居る、即ち疱瘡にかゝらぬ様に、またかゝつても軽くすむ様に、惡鬼退散の意味で、例へば鍾馗しやうきが鬼を追拂つて居る所などを繪にする、それ故實際子供が見ても親しみのないものであります、其後此種の繪も次第に變つて、だん／＼おだやかな繪になつた様です。しかし色は何處迄も赤を用ひ、全體を赤色にして、之は子供の玩具箱おもちゃばこの中に一枚づゝ入れて、謂ゆるまちなひにするのであります。

(二) 風繪——これは、かの繪風かふう、字風じふう、など云ふ時の風に書かれた繪の事を云ふのでなく、風に用ふる繪をそのまゝ繪として、繪の上で樂しむのであります。

(二) 教訓繪——人に人倫五常の道を知らせる繪で面白いものではない。この種のはあまり多くはありませんが其後次第に變つて、初めは此目的で出發しながら筆者が途中から諷刺的になつた

り、滑稽化したりして遂に反對に非教訓的になつてゐるものも少くないのであります。

(四)細工をして楽しむ繪——これは剪り組み細工をして遊ぶもので例へば箱を作るとか、或は切り組み燈籠とうろうとし或は千代紙などと云つて剪つて遊ぶ繪を云ふのであります。

(五)繪おもちや——繪を以てこしらへた玩具であつて玩具にするための繪ではないので、例へば、十六むさし、双六、かるた、目かつら、福笑ひ、あてもの、影繪、判じ繪など之に屬するものであります。

(六)俚謡を繪にかけるもの——これは、大人の趣味に合するものが多い。尤も一時非常に流行して子供に喜ばれたチンワン節ちんわんぶしを繪にしたものがあります。これはその節と共に子供に縁の深いものであります。其外尻取文句しりとりもんくを書いたものなどもあり、一つとや節を繪にしたものもあります。しかし何れもあまり子供には親しみのないものであり

ます。

(七)つちうら繪——これは辻占に入れるものを集めたもので、大人の一種の趣味には合するものであるが、子供のものとしては決して善いものではありません。

○おもちや繪の歴史

大した歴史と云ふ程のものもなく、其の起源、變移など記録もなく又詳しく調べても居りませんが大體を申しますと其起源は古いので——明らかに時代はわからず——しかしそれが「おもちや繪」としての確かな位置をしめる様になつたのは安政の前後と思はれる、しかして更に眞の意味を持つ様になつたのは明治維新を中心として其前後二十年乃至三十年の間であります。明治になつてからは社會の狀態も、また、其の心理も變化し、其上に印刷術が變り且繪具のよいのがなくなると云ふ所からこのおもちや繪も衰頽すいたいの運命に陥り再び見

るべきものなきに至つたのであります、しかし今日
は全然ないと云ふのではなく明治四十年頃のもの
も、又、大正になつてからも見られるけれどもし
かしもはや昔の姿はないのであります、しかし普
通の錦繪浮世繪などに比べれば其壽命は先づ永か
つたと云へませう、即ち其のよい種類が後になる
程出て居るので其錦繪などよりも永くつゝいた原
因は、其發達が遅く若々しかつたため餘勢がつゝ
いたと云ふ事と其の終り頃におもちや繪の天才と
も云ふべき「芳藤」が出て明治維新前後三十年乃
至四十年に亙つて盛に製作したためであります。

○おもちや繪の筆者について

おもちや繪のごく初期の筆者にどんな人があ
つたかは、よくわかりませんが、繪に署名もなく知
る方法がないのですが、しかし兎に角、之をかい
た人の内では「國芳」の門人が一番多いので、而
らば國芳は如何にと云ふに、この人自身かいたと

云ふ説と書かぬと云ふ説と二通りあります、けれど
も書いたとしてもそれは私の定義したおもちや繪
ではない様です、門人には随分あるので芳虎、芳
幾、芳員、芳艶、芳盛、芳藤、などが盛んに書い
て居ます。又同門下以外の人でも國綱、國政、國
郷、國利、艶丸など居りますが、大したものでは
ありません、かの有名な廣重の二代目、三代目、
が若くして廣重と云はず重宣、重政と云つた時代
に書いたものもあり、又かの北齊のものも少しは
ありまして、お湯屋の切り組み燈籠などは有名な
ものであります。しかし製作の數から云つても其
價值から云つても第一は芳藤で芳藤は實に天才で
す彼によつて「おもちや繪」は大成し、またこの
人とともに亡びたのであります。

○おもちや繪の趣味

前にも申し上げた様に「おもちや繪」は子供
を享樂の主體とする版畫であります、この、子

供と云ふものを本として考へると子供を樂しませるためには其の趣味にあふ様に、またよく其心理を了解しなければなりません、しかもまた子供が自由に樂しみ得るためには値段が安くなければならぬと云ふ經濟上の制限があり、且、「おもちゃや繪」は版畫でなければならぬと云ふまた製作上の制限もあります。

扱て其趣味の一つは版畫であると云ふ事——即ち錦繪の趣味——で即ち堅い木の上に繪具を塗り、其上に水を吸ひ込む紙をのせて、竹の皮で擦ります、すると繪具が紙に滲み込む、其處に味がある、今この印刷は繪具を紙の上にのせますから、紙から光が反射してキラ／＼します、そのために一旦滲み込んでから撥ね返ると云ふ滋味はありません、のみならず版畫は堅い線の上を擦りますから線が明瞭してクツキリと出ます此處が肉筆ではとてもあらはされない所です。

次に「おもちゃや繪」の味は安い版畫であると云

ふ事にあるので、紙は安いのをを用ふるのは勿論ですが金のかゝるのは繪具と版木です、先づ繪具は出来る丈け色の種類を少くし普通四種位を用ひて、あらゆるものを現はそうとするのでどんな複雑な色のものも之を三つか四つに分解し決して間色を用ひないのであります、即ち「おもちゃや繪」では生のまゝの色をそのまゝ用ひるので、かの新しい洋畫家が印象派などと云つて單純な色によつて新鮮な氣持をあらはすのと似て居ります。

しかし「おもちゃや繪」の本領はこの安い版畫と云ふ仕方のない方面ではなしに、子供の心理、其趣味に適すると云ふ事にあるのです。

素樸なる事——子供に合ふ一つの味としては素樸的と云ふ事で、全體の構圖も色も形も、又、其意味も素樸である、まはりくどい堅くるしい事は棄て、たい有りの儘を無邪氣にあらはす、これが「おもちゃや繪」のもう一つの味であります。近代文明の中に毎日押し込められて居る我々はこの

繪に接する時、實に一種の自由を感じ、新しさをうれしく思ふのであります。

清新なる事——子供は停滯を忌むものです。子供は實に飽きやすく常に新しい刺激を要求して之に同化し共鳴するものであります、彼等には傳説もなく、古めかしい、いやな約束もありません、そこで「おもちゃ繪」では傳説とか習慣とか云ふものを顧慮する必要がなく、飛行機が出來たと云へばすぐ之を繪にする、又玩具につくつて楽しむ、自動車が行ればすぐにまた之を取り入れるのであります。かの大人を對象として書いて居る文展の日本畫には未だ飛行機も自動車もあらはれず、相變らず駕籠かこに乗つて旅をする所や、牛の車に乗つて春の日を櫻狩に出かける人をかいて居るのを思へば「おもちゃ繪」はこれによつてのみ味ひ得る一種の鮮新の感がおこるのであります。

自由なること——子供には一定の型にはまつて物事を見ると云ふ事が出來ないので、有りの儘、

正直なもので厭いやなものは厭いやですし、食べたければ遠慮なく其欲を充す事に熱中し、悲しければ思ふまゝに泣くと云ふ風であります、そこで「おもちゃ繪」にも其構圖、形、色、題などに實に自由奔放な所があつて古き型に捉はれない、これは四六時中、形にのみ押しこめられてゐる我々が見て一種の面白味と輕快なる感とをおこす所以であります。

空想的なる事——子供は何をとらへても之を自分化する——自分と同じ様に生命あるものと見てしまふ、すべてが自分の友達であつて茶碗に向つても机に向つても平氣で話を仕かける、即ち事物に對する深き同感を有するもので、實にこれ程美しい空想はありますまい。「おもちゃ繪」はこの子供の心持をよく現はして居るもので、「おもちゃ繪」の面白味の大部分は此處にあります、猫の芝居とか酸漿はじまの遊びとか、たこ入道の芝居とか云ふ繪を見て我々は實に面白く思ふのでこの點から云へ

ば「おもちゃ繪」は空想の純の純なるものとも云へませう、其空想とても我々大人の描く様な理屈づめの冷たい野心的のものではありません、暖い、そして萬有が自分のお友達であるとの同情を根底とするものであります、近頃ひねくれた空想があつて藝術家などがいろ／＼流布して居る時にかゝる同感に充ち／＼た空想のあらはれに接するとき一種爽快を覺えるのであります。

自然法を超越する事——子供の驚くべき空想のまへには自然界の法則は何等の權威を持ちません、かの童話が已に自然法を超越して居ります様に「おもちゃ繪」は實に寧ろ痛快を覺える迄に自然法を超越して居るのであります、毎日毎日この法則の中に鐵の鎖でつながれて、爲る事も話す事も一々、右に左に顧慮しなければならぬ我々の生活にとつてこの思ひ切つて自然法を打破り、否超越して居る「おもちゃ繪」の存在する事は誠に愉快な事であります。

○「おもちゃ繪」と兒童

及幼年繪雜誌との關係

前から申しました通り子供は非常に空想的なものであります、が兒童及幼兒教育には此の空想——萬有に對する深き同感——をよく指導し、充分發達させる事が大切で「おもちゃ繪」及幼年繪雜誌の存在の價值は此處にあります、實際、子供の時代によく空想をおこしたものが大人になつてから人格的に偉大な人間となるので——俗に謂ゆるえらい人間になるかどうかはわからぬが——然らば子供の空想を善導するには如何にすればよいかと云ふに先づ彼等子供の心によく共鳴し同感して行く事が必要であります、抑今日行はれてゐる多くの幼年繪雜誌はどうでありますか、眞に子供の心、其の生活に共鳴して其間から自然と湧き出して繪となり雜誌となつて居るものは殆どありません、大人の自分の勝手に考へ出した變な趣味を

子供に押しつけ様とする嫌がある、我々大人が見て閉口しなければならぬ様な難しい教訓がならべてある、其道具だては結構であるがしかし子供に眞に同感する温情も生命も其處になく子供はかゝる繪に接しては恰も乾物の魚を見る如く、生きて動いて居る魚を知らずに終る事になる。

大人の世界、大人の趣味からのみ、子供を見ると云ふこの矛盾から、外面的に子供を面白がらせると云ふ事が起つて来る、其處から「斯々の生活が子供を幸福にする」と云ふお膳立てを此方からこしらへて出す様になる、子供は泥の中に轉がつてしまつて「日曜日にはお父様、お母様、皆連れ出つて自動車にのつて上野へ行く」又は飛行機でとびまはる、これは楽しい生活であると云ふ様に示す、私は何も泥の中に轉がるのを賛成するわけではないが、しかし、眞の喜びを忘れてたゞ外面的にのみ大人の喜びそうなものを書く事を實に遺

憾に思ふ。もし現今繪雜誌にあらはれて居る様な子供の生活が眞に幸福ならば我々の如き資力足らざるものは子供を満足させ幸福にするためには破産しなければならぬのであります。かく考へ來れば現今の繪雜誌は無用の長物、否寧ろ有害無益なものと云はなければなりません、子供の内的生活に共鳴して、一片の木切、一塊の石ころの中にも子供にとつては無限の喜びがあり詩も歌も音樂も此處にひそんでゐる事を教へてこそ、以前の「おもちゃ繪」に匹敵すべき現今の繪雜誌の使命其存在の理由があるのではありますまいか、しかるに虚榮の生活をのみ教へるのを唯一の題材として居る事は子供の趣味性を損ひ、狭き範圍におしこめて變則な發達をさせる事になるのであります、此の點から私は「おもちゃ繪」の天才「芳藤」について一言せざるを得ないのであります。

芳藤は平凡な繪書きで、名を西村藤太郎と呼び國芳の門下生でありました、初め「一鵬齊芳藤」と

云つて廣く美人繪、武者繪などを書いて居りましたが維新の十數年前から「おもちゃ繪」を書く様になりこゝに一生面を開いたのであります、而して其繪は質に於ても——よいものを書いたこと——量に於ても——澤山書いた事——他の人のとても及ばぬ所です、淺草に住み純粹の江戸兒でした、明治二十何年かに歿した人です、彼の生活の一面をあらはす逸話が殘つて居ります、それは或る時、彼は朝湯に出かけ襦袢どてらをひつけて湯から出て來ると、獅子舞ひが大鼓をたいて行く其あとから大勢の子供がついて行くのにあひました彼は手拭を肩にかけて、その儘何處までも之のあとをついて行つた、家の人は何うしたことかと不審に思つてゐると晝すぎに間の抜けた様な顔をして塵だらけになつて、びよつこり家に歸つて來たと云ふ事です、これは彼がいかに子供の心に同感し、子供とともに生活したかを語るものでせう、實際彼の繪を見て居ると子供に對する無限の共鳴

同感のあふれて居るのを感じるのであります、今日は、一人でも、かゝる繪かきがあればよいと思ふ、芳藤は難しい教育上の意見、主義は知らなかつた、しかも彼は、子供とともに喜び、子供の生活の中に深く生きて行かうとする哲學を知つてゐた、彼には兒童心理學はなかつたが實際體得した同感の心理學があつたのです。

私は今日幾千の有害な繪雜誌の世に行はれるよりも唯一の「芳藤」が出て子供の心に共鳴して欲しい、たつた一人でよいから眞に子供に同感ある繪をかいてくれる人の、あらはれん事を熱望してやまない次第であります。(筆記)